

として扱ひかねてゐるので今のまゝではまるで氣合をかける道具の体で甚だ面白くない。猶別に説教師といふものがあるが、後世の浪花節などは之から出たものであるけれども、本家の説教師の方がよつほど進歩してゐる。しかし元來都の音楽ではなくて田舎の音楽にすぎない。琴も矢張り拍子をどる爲の樂器で、之を伴奏として使つたのは八橋以後の事である。以上が大体平安朝時代の樂器の奏し方である。

支那から傳つたもの、外に、催馬樂。今様。朗詠等は之を郢曲といふ。催馬樂は奈良朝時代からあつた俗謡とちがつて平安朝時代に矢張り支那から來たものである。之は立派な音楽で、當時の日本音楽の代表ともすべきものである。之に反して朗詠は興に乗じて吟ずる詩の様なもので、多少の節の變化は人によつて自由である。朗詠の時は笙が聲の後から行くが、催馬樂は笙が先へ出る。笏拍子なども催馬樂にはあるが朗詠にはない。是等は支那音楽を最も日本化したもので、發達してゐた支那のハーモニイなどはすつかり抜いて、たゞ一筋のメロヂリとしたものである。

要するに平安朝時代の音楽は今日の我々から考へても驚くほど發達したものである。立派な管絃樂等に至つては決して西洋のそれに劣る事はないと思ふ。故に今後我等が家庭に入るべき日本音楽の研究をなすに際しては先づ平安朝時代の音楽に足場を置いてなほ研究の歩をすゝめ、取捨選擇して改良して行つたなら斯道の爲に裨益する所が少くないだらうと思ふ。(文責在幹事)

### 病みて

尾上柴舟

一處枕の低くなる迄に片寝するかな身のいたみゆる  
目ひらけば朝の光ぞさやかなるかゝる日もなほ寝ねばならぬか  
病むよりも悲しきものは病む毎に身におぼえくる衰にして  
けふもまた上りのみする熱ゆるに歎かふ妻を見るがわびしき  
物も云はず身じろぎもせでねてあれば此の身さながら屍のごと  
かりそめと思ひし病古枕かしら埋るゝまでになりなき  
朝に添へゆふべに添へてわが肌に檢温器こそしたしかりけれ  
寝ることのたへがたければ朝の床めまひする身を起しても見る  
外面には美し雪し嵐して道行く人も苦しがるらむ  
夕時雨雪となりけむ身ぶるひをするらしき木の音ぞたえせぬ